

# 幕末期在村蘭方医の医療と社会活動

清家堅庭の足跡

井上淳

The Medicine and Social Activities of Village Physicians of the Western School at the End of the Edo Era

はじめに

- ①清家堅庭の医療活動
- ②清家堅庭の社会活動
- おわりに

[提要]

文化二年（一八一四）に宇和島藩領の宇和郡八代村（愛媛県八幡浜市）八尺神社の神職の家に生まれた堅庭は、地元の八幡浜本町の医師二宮春祥に医学を学んだ後、嘉永元年（一八四八）には長崎におもむき蘭方医植林宗建のもとで蘭医学を本格的に学んだ。その後、嘉永三年（一八五〇）から亡くなる明治一〇年（一八七七）にかけて八幡浜と八代村で地域医療に従事した。堅庭が医療を行った幕末期、八幡浜地域では患者が望めば複数の医師の治療を受けることができる条件が整いつつあった。そうしたなか堅庭は、「薬品之儀ハ医術之根元」という精神のもと、よりよい薬を求めて医療にあたり、嘉永五年（一八五二）に宇和島藩で種痘が始まった際には、他の在村医とともに藩領全体への種痘の普及を地域で支える役割を果たした。

本居派の国学・和歌も学んだ堅庭は、嘉永六年（一八五三）から明治六年（一八七三）にかけて私塾を開き近隣の約三百名の子弟を教えるなど、自らが身に付けた知識

を地域に広める活動も行った。その最も特筆される活動に、八尺神社内に私設図書館の王子文庫を創設したことがあげられる。安政六年（一八五九）に二間四方瓦葺きの建物が完成し、漢字・国学・蘭医学など幅広い分野の書物が千冊以上も集められた。王子文庫は堅庭の蔵書を主体としつつも、近隣の庄屋や地方文人のネットワークで多くの書物が奉納されており、それらの書物は広く地域に公開された。

これまで在村蘭方医の研究は医療を中心に進められてきたが、堅庭の事例からは、在村蘭方医が医療にとどまらず、自らが学んだ知識を地域に還元していく社会的な存在であったことが見えてきた。また、神職で国学を学んだ堅庭が医師となり、蘭医学を学んでいることは、堅庭のなかで国学と蘭学とが両立していたことを示している。その両立には、国学を中心とする漢字と洋学の三学総合の大学を設立しようとする明治二年（一八六九）の大学構想に示された精神に近似するものがある。